



TITLE:

十七世紀のインド洋西海域世界におけるイエメンの對外關係

AUTHOR(S):

栗山, 保之

CITATION:

栗山, 保之. 十七世紀のインド洋西海域世界におけるイエメンの對外關係. 東洋史研究 2006, 65(2): 406-372

ISSUE DATE:

2006-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/138192>

RIGHT:

17世紀のインド洋西海域世界における イエメンの対外関係

栗 山 保 之

は じ め に

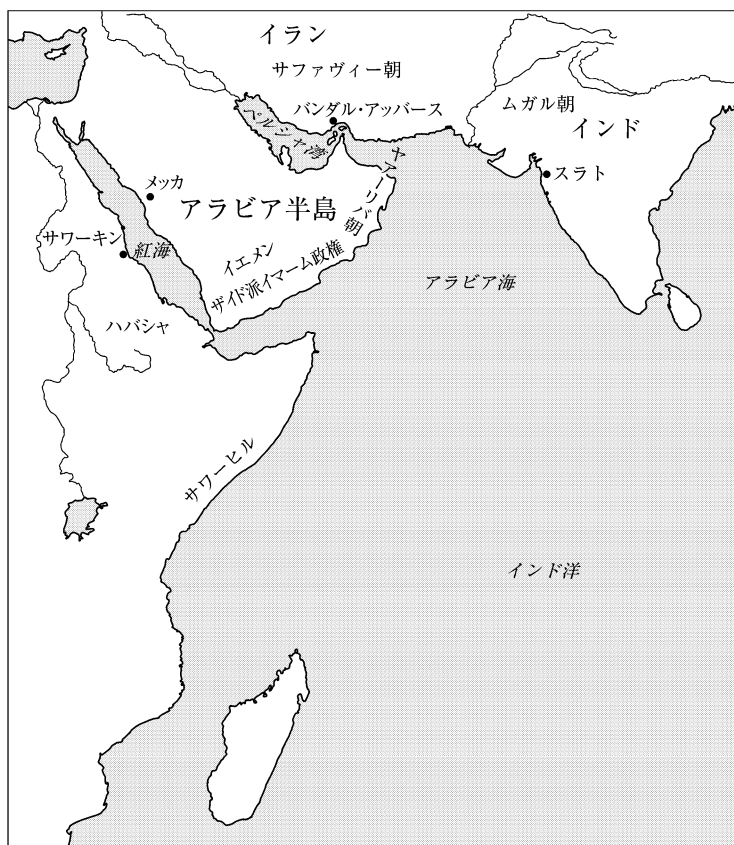
- 1 ヤアーリバ朝との関係
 - 1 ズファール地方をめぐるヤアーリバ朝との対立
 - 2 ヤアーリバ朝の海洋活動とイエメンの対応
- 2 サファヴィー朝との関係
- 3 ムガル朝との関係
 - 1 ムガル朝との通交関係の形成
 - 2 イエメンの親ムガル朝政策とその理由

お わ り に

は じ め に

1045／1636年に、945／1538年以來イエメンに駐留していたオスマン朝勢力の排除に成功したザイド派イマーム政権⁽¹⁾は、その支配領域をイエメン北部の山岳・高原地域から紅海沿岸地域へと拡大し、さらにアラビア海沿岸地域を含むイエメン南部全域を支配下におくと、1069／1659年にはオマーンとの境域地帯であるイエメン南東部のハドラマウト地方へ派兵して、その軍事的、政治的

(1) イエメン・ザイド派イマーム政権に関して、邦文ではとりあえず、以下の拙稿を参照されたい。拙稿「中世イエメンのザイド派イマームと部族」『日本中東学会年報』第13号、1998年、215-232頁。同上「中世イエメンにおけるザイド派イマームの租税制度」『東方学』第98号、1999年、132(1)-121(12)頁。同上「11世紀後半～12世紀前半におけるイエメン・ザイド派勢力のヒジュラ」『東方学』第102号、2001年、92(1)-78(15)頁。同上「9世紀末～11世紀後半におけるイエメン・ザイド派勢力のヒジュラとその変質」『東洋学報』第83巻第4号、2002年、533(24)-505(52)頁。なお筆者は、これらの論考をまとめて若干の修正と大幅な加筆を施した後、博士学位論文「中世イエメンのザイド派イマーム政権に関する基礎的研究」(中央大学、2004年3月、未刊行)とした。

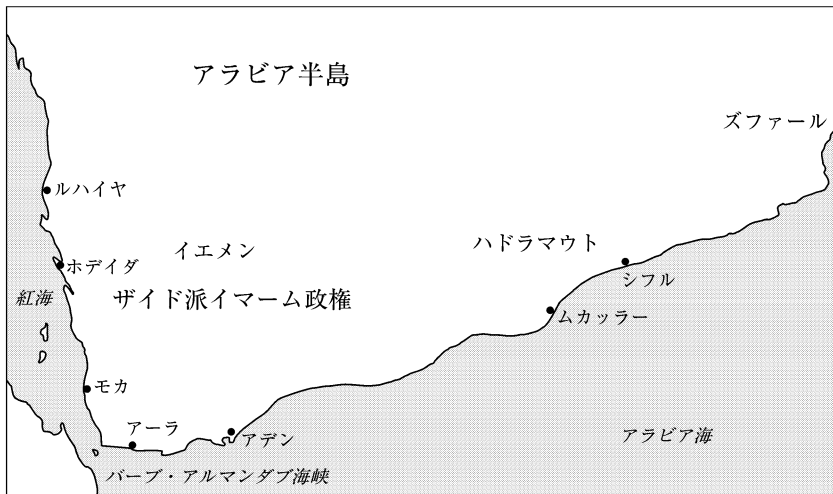


地図1 インド洋西海域世界

な影響力を急速に伸張した。この結果、17世紀の南アラビア情勢は大きく変容し、その余波はインドやイランにも及んだのであった⁽²⁾。

そもそも9世紀末にメディナからイエメンへ移住してきたイマームが中核となって成立したザイド派イマーム政権は、精緻な租税制度の形成とその運営によって財政基盤を整備し、持続的な軍事活動の展開による支配領域の拡大に努めていたが、イエメン南部地域や紅海沿岸地域に常に並存していた諸王朝との

(2) 詳しくは以下の拙稿を参照のこと。拙稿「17世紀の南アラビア情勢とインド洋西海域」中央大学人文科学研究部編『アジア史における社会と国家』中央大学出版部、2005年、285-313頁。



地図2 イエメン

軍事的、政治的な拮抗関係により、その支配はイエメン北部の山岳・高原地域に限定され、内向的な領域経営にとどめられていた。ところが、この17世紀のオスマン朝勢力の撤退を契機として、ザイド派イマーム政権は紅海・アラビア海沿岸地域およびイエメン南部全域へその支配領域を拡張することに成功すると、外向的な政権運営への転換を図り、ルハイヤ al-Luḥayya, ホデイダ al-Hudayda, モカ al-Mukhā, アデン ‘Adan, シフル al-Shiḥr などのイエメンの代表的な交易港をつぎつぎと掌握して来航する貿易船に対する管理を強め、紅海・アラビア海・ペルシャ湾といった海洋を媒体として構成される有機体としてのインド洋西海域世界への展開を志向するようになったのである。

インド洋西海域世界には当時、オマーンのヤーリバ朝 Ya‘rubids (1034-1156/1625-1743年), イランのサファヴィー朝 Ṣafawids (907-1135/1501-1722年), インドのムガル朝 Mughals (932-1274/1526-1858年) といった大王朝が隆盛していた。同時代に著されたイエメン・南アラビア関連の諸史料が伝えるところによると、オスマン朝撤退後のイエメン・ザイド派イマーム政権は、これらの諸王朝との対立や協調などさまざまな関係の形成を通じて、イエメン内陸部からインド洋西海域世界への関心を高めていたことが確認できるのである(地図1・2参照)。

そこで本稿では、この17世紀のインド洋西海域世界におけるイエメンの対外関係に関して、同海域世界に存する諸王朝・諸勢力との対外的活動が最も活発に展開されたザイド派イマーム＝ムタワッキル al-Imām al-Mutawakkil ‘alā Allah Ismā‘īl b. al-Qāsim (在位1054-87/1644-76年) 政権期を中心に検討してみたい。具体的には、ヤアーリバ朝、サファヴィー朝、ムガル朝との関係の諸相を中心に分析するが⁽³⁾、本稿においてこれら諸王朝との関係を同時にとり上げその全体的な構造を俯瞰するのは、この時期のイエメンの対外関係が、従前のインド洋海域世界に関する研究のみならず、イエメン・南アラビア史研究においてさえも、ほとんど言及されていないからである。それゆえ、イエメンとこれら諸王朝との対外関係を鳥瞰することは、今後、17世紀のインド洋海域世界に関する研究が進められてゆく上で、一つの検証材料を提供することができるかと思われる。

なお、この時期のインド洋海域では、ポルトガル、オランダ、イギリスなどの西欧諸国が武力による海域支配と交易圏の拡大をめぐって激しく対立し、インド洋西海域世界の諸王朝に大きな影響を及ぼしていた。イエメンに限ってみても、ポルトガルやオランダとの関係が認められるところであり、これらとの関係についても検討すべきであると思われるが、上に述べたように、本稿ではインド洋西海域世界に存する諸王朝との関係の分析を第一の目的としていることから、西欧諸国との関係については最小限の言及にとどめることとする⁽⁴⁾。

(3) 紙数の関係上、本稿でとり上げることができない紅海海域の政治勢力として、メッカのアミール政権やエチオピアのキリスト教国ソロモン王朝、あるいはサウードに駐留するオスマン朝勢力などがあるが、これら諸勢力との関係は別稿にて考察する予定である。

(4) ポルトガルとイエメンとの関係の概要については、ハドラマウト地方史を用いたサージェントの古典的な研究がある。Serjeant, R. B., *The Portuguese off the South Arabian Coast*, Beirut, 1972. ポルトガルのアデン港の攻略やパーブ・アルマンダブ海峡付近における海洋活動については、当該時期のイエメン史料を英訳し詳細な注を施した下記の研究がある。Schuman, L. O., *Political History of the Yemen at the Beginning of the 16th Century*, Groningen, 1962. 邦文では以下を参照のこと。福田安志「ペルシャ湾と紅海の間」『世界歴史14 イスラーム・環インド洋世界』岩波書店, 2000年, 115-140頁。オランダとの関係に関しては、17世紀のオランダ商人 Pieter van den Broecke の日誌の抄訳があるが (Beckingham, C. F., “Dutch Travellers in Arabia in the Seventeenth Century”, *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1951,

本稿で用いる主な史料は、イエメン関連のアラビア語史料である。ザイド派の歴史家ヤフヤー・ブン・アルフサイン *Yahyā b. al-Ḥusayn* (1100/1689年歿) の『11世紀におけるサナア日誌 (*Yawmiyāt Ṣan'ā' fī al-Qarn al-Ḥādī al-'Ashar*⁽⁵⁾)』(以下、本文では『日誌』と略す) は、1045/1636年から1099/1688年までのイエメン史に関する詳細な年代記でありながら、マグリブ、エジプト、トルコ、アラビア半島、イラク、イラン、インドなど広範な地域における同時代の情報をも収録しており、17世紀の西アジア・西南アジア情勢を検討するうえで、重要な史料の一つといえよう。同じくザイド派の歴史家ジュルムージー *al-Jurmūzī* (1100/1689年歿) の『イマーム＝ムタワッキル伝 (*Sīrat al-Mutawakkil 'alā Allāh Ismā'il b. al-Qāsim al-Manṣūr*⁽⁶⁾)』(以下、本文では『伝記』と略す) は、他の同時代史料には収載されていない、ムタワッキルの書簡や命令を多数収録しており、それらのなかにはイエメンの対外関係を考察する上での重要な史料となる周辺諸王朝の支配者とムタワッキルとの往復書簡の写しが多く見出されることから、その史料価値はきわめて高いと考えられる。

pp. 64-81, 170-181.), 紅海海域におけるオランダの活動の中心であったモカ港については、下記のブラウワーの研究が最も新しく参考になる。Brouwer, C. G., *al-Mukhā Profile of a Yemeni Seaport as Sketched Servants of the Dutch East Company (VOC) 1614-1640*, Amsterdam, 1997. なお、16世紀から19世紀までのインド洋海域世界に関する研究動向については、以下を参照されたい。Das Gupta, A., and Pearson, M. N., *India and the Indian Ocean 1500-1800*, Oxford University Press, Oxford, 1987.

- (5) この史料の正式な名称は『イエメンの諸事件に関する時代の輝き (*Bahjat al-Zaman fī Ḥawādīth al-Yaman*)』であるが、校訂者は書名を変更している (*Yawmiyāt Ṣan'ā'*, pp. 16-22)。しかし、煩雑さを避けるために、本稿では校訂者による書名表記のままで用いる。
- (6) この伝記の写本は、ヴァチカン図書館とハドラマウトのムカッラー *Mukallā* にあるモスク附属スルタン図書館 (*The Sultan's Library*) に所蔵されており、サージェントは後者を用いて幾つかの研究を発表しているものの、筆者は後者の写本を入手することができないため、前者の写本を用いたが、サージェントによると、後者は前者にほぼ一致しているとしている (*Serjeant, The Portuguese off*, pp. 112-3)。なお、サージェントはこの伝記の著者名をジャルムージーと読んでいるが、ジュルムージーが正しい読み方である (*Ayman Fu'ād Sayyid, Maṣādir Ta'rīkh al-Yaman fī al-'Asr al-Islāmī*, Cairo, 1974, p. 236)。

1 ヤアーリバ朝との関係

1 ズファール地方をめぐるヤアーリバ朝との対立

アラビア半島の南西端においてザイド派イマーム政権がオスマン朝のイエメン駐留軍と支配領域をめぐって軍事的に拮抗していた時期に、同半島の南東端ではハワリジュ派の一分派であるイバード派の王朝ヤアーリバ朝がその勢力を拡大させつつあった。

17世紀におけるこのヤアーリバ朝とイエメンとの関係の一端については、すでに別稿において検討したとおりである⁽⁷⁾。すなわち、イエメン南東部のアラビア海沿いに広がるハドラマウト *Ḥaḍramawt*・ズファール *Zufār* 両地方の有力家系の一つであったカシール家 (*Āl Kathīr*) の内訌にイエメンとオマーンがそれぞれ軍事介入し、双方はズファール地方において対峙することとなったが、1070/1660年に、ヤアーリバ朝のイエメン侵攻を非難し、その撤退を要請する書簡が「インドまたはイラン」から送付されたため、同王朝は後退し⁽⁸⁾、翌1071/1661年にはイエメン側が、すでに支配していたハドラマウト地方に加えてズファール地方をも実質的にその支配下におくことで、同地方をめぐる両国間の対立関係は小康を得たのであった。

ズファール地方は古くから乳香 (*lubān*) の特産地として名高く、17世紀においても同地方の港には、カシール家所有の船や外国人 (*ajānib*) の船が乳香を求めて来港していた⁽⁹⁾。またズファール地方は、イエメン側の史料によると「真珠の首飾り (*‘iqd al-jumān*) の中心部分」の如く、ハドラマウト地方とオマーンとの中間に位置していたために、イエメンにとって戦略上重要な地域でもあ

(7) 拙稿「17世紀の南アラビア情勢とインド洋西海域」、287-94頁。

(8) 書簡を送付した王朝名は言明されていないものの、筆者は、ヤアーリバ朝が書簡を受領した時期から判断して、インドはムガル朝のアウラングゼーブ、イランはサファヴィー朝のシャー・アッパース2世ではないかと推測している (拙稿「17世紀の南アラビア情勢とインド洋西海域」、292-3頁)。

(9) 『伝記』には、外国人たちが出入港していたこの港の具体的な名称は記されていないが、恐らくライスート *Raysūt* かミルバート *Mirbāt* であったと思われる (*Sīrat al-Mutawakkil*, f. 61a)。

り⁽¹⁰⁾、事実、1071/1661年にズファール地方を手中に収めたムタワツキルにとって、同地方はオマーンと対峙する上で、重要な軍事防衛線の役割を担う地域であった。

このため、1073年ラジャブ月末/1663年3月上旬に、それまでズファール地方を挟んで対峙していたヤアーリバ朝軍の陣営における不穏な動きがイエメン側に伝わると、これを同地方への侵攻とみなしたカシール家は一気に攻勢に出て、同王朝所有の大砲2門を獲得した後にこれを完全に排撃し、ザイド派イマーム＝ムタワツキルの名を同地方における金曜礼拝で宣誓することによって、イエメンによる支配を再度、確認したのであった⁽¹¹⁾。

ズファール地方をめぐるこの戦闘から7年後の1080年ラビー・アルアッワル月/1669年8月、ヤアーリバ朝のスルターン・ブン・サイフ1世 *Sulṭān b. Sayf I* (在位1059-91/1649-80年)の親書がムタワツキルのもとへ届けられた。イエメンの歴史家イブン・アルワズィール *Ibn al-Wazīr* (1147/1735年歿)の年代記『菓子皿と糖蜜や蜂蜜の大杯 (*Ṭabaq al-Ḥalwā wa Ṣiḥāf al-Mann wa al-Salwā*)』には、この親書の写しが収録されているが、そのなかでズファール地方に関して、つぎのように記されていた。

……さてさて私たちが先頃、ズファールの地を支配した折に、その地は私たち [の居住地] から遠く、危険で水のない沙漠でありますけれども、私たちはその地を統治することにおいて [何ら] 素晴らしさを見出すことができませんでした。……それゆえ私たちはそれ (ズファールの地) を諦めますが、それは強硬な武力を恐れているからではなく、私たちに対する外的な影響からでもなく、また襲いかかる腕や強盗する掌からでもありません。[ところで、] 私たちのアーミルであるハラフ *Khalaf* がそこ (ズファールの地) を撤退する時に、彼はムスリムたちの大砲 (*madāfi'*) をそこに置いて来てしまいました。……もしあなたが私たちの望むものをお望みならば、そして私たちが求めるものをお求めならば、それらを私たちにお返し

(10) *Ṭabaq*, p. 188. なお、引用史料中の [] は達意のために筆者が補ったものであり、() は同意語を示す。以下同様。

(11) *Ṭabaq*, pp. 187-8.

下さい¹²⁾。

イエメン側の史料によると、スルターン・ブン・サイフ1世は、ズファール地方への軍事侵攻はそもそもカシール家の要請に応じたものであり、自ら望んで実施したのではないと憤怒したと伝えられている¹³⁾。確かに、内訌状態にあったカシール家内の反ムタワッキル一派がヤアーリバ朝に対して軍事支援を要請しており¹⁴⁾、上に引用した親書の抜粋はまさにそのことを裏付けているといえよう。親書のなかでは、ズファール地方がオマーンから遠く危険で不毛な砂漠地帯であることを理由にヤアーリバ朝の撤退が公式に表明されている。これは、先の戦闘でヤアーリバ朝軍がイエメンによって奪取された大砲の返還要請を前提とした同王朝の譲歩であることは明らかであるが、この撤退表明の真意は、次節において検討するように、ヤアーリバ朝が当時すでにペルシャ湾やアラビア海において活発な海洋活動を展開しており、ズファール地方の統治経営に対する関心が相対的に低下していたことにあると考えられる。

ところで、このスルターン・ブン・サイフ1世の親書に答えたムタワッキルの返書の写しが、「サナアの王 (Malik Ṣan'a') の返答」として、オマーンの現代史家サーリミー 'Abd Allāh b. Ḥumayd al-Sālimī (1914年歿) 編纂の『オマーンの人びとの伝記による名士たちの贈物 (Tuhfat al-A'yān bi-Sirat Ahl 'Umān)』に収載されている。この返書の写しは、同時代のイエメン側諸史料には全く記録されていないため、偽書の可能性も捨てきれないものの、以下でおこなう内容の分析から、恐らく偽書ではないと考えている。

さて、この返書は、先に訳出したスルターン・ブン・サイフ1世の親書を受領したと述べた後に、つぎのように続いている。

……確かに、あなたの土地とわれわれの [土地] とでは非常に隔たりがあり、あなたとわれわれの間には諸都市 (amṣār) が存在するがゆえに、あ

(12) *Ṭabaq*, pp. 255-7. この親書に関しては、すでにサージェントによる英訳と簡単なコメントが報告されている (Serjeant, R. B., "Omani Naval Activities off the Southern Arabian Coast in the late 11th/17th Century, from Yemeni Chronicles", *Journal of Oman Studies*, VI, 1983, pp. 77-89)。

(13) *Ṭabaq*, p. 188; *Yawmīyāt Ṣan'a'*, p. 122.

(14) *Sirat al-Mutawakkil*, f. 84a; *Ṭabaq*, p. 168; *Yawmīyāt Ṣan'a'*, pp. 110-1.

あなたは無遠慮に振舞い、その結果、あなたは分別を超えているのです。そしてあなたは、あなたの地において無類であり、そのためにあなたは、あなた一人で襲撃や攻撃を求めているのです。……それゆえ、これらの〔2門の〕大砲に対する、あなたが熱望する繋がりを通ち切ってしまいなさい。なぜならば、もし神がお望みならば、それは遠方のあなたの地からの最初の戦利品（ghanīma）だからであります⁽¹⁵⁾。

ここにみえる2門の大砲とは、明らかに先のスルターン・ブン・サイフ1世の親書に記された大砲のことであろう。この大砲に関してイエメン側の一史料には、先のスルターン・ブン・サイフ1世の親書受領後に、ムタワツキルが大砲の返還を命じたとする記事が残されている⁽¹⁶⁾。しかしながら、長期化していたヤアーリバ朝との軍事的な緊張関係が高まっていたこの時期にあって、イエメン側がヤアーリバ朝の要請に安易に応じたと判断するのはいささか無理があると思われる。むしろ逆に、大砲は返還されずそのままイエメン側に保持されていたと考える方が無難であろう。仮にそうであるとするならば、このムタワツキルの返書に記された情報は、当時の状況と合致しており、加えてその内容が必ずしもヤアーリバ朝にとって有利に展開する内容ではないことから考えると、恐らくこの返書は偽書ではないと判断できる。

さて、ここで上に引用したムタワツキルの返書を改めてみると、その記載のなかで注目すべきは、先のスルターン・ブン・サイフ1世の親書で記されていたズファール地方統治に関する事項について、ムタワツキルがその返書のなかで一切触れていないことである。これは、ズファール地方の帰属がすでにイエメン側にあることを自明のこととして捉えていたからであろう。それゆえ、ムタワツキルはヤアーリバ朝によるズファール地方への侵攻が「分別を超え」た行動であると非難し、同王朝から奪取した大砲を「戦利品」として、その返還要請を拒否したのである。

こうして、1070/1660年以来、およそ10年にわたって続いたズファール地方

(15) *Tuhfat al-A'yān*, II, p. 59.

(16) イブン・アルワズィールは、スルターン・ブン・サイフ1世の親書を引用した後、ムタワツキルが大砲の返還を命じたと記している（*Ṭabaq*, p. 258）。

の領有をめぐる両国関係の対立は、1080/1669年に至ってイエメンによる同地方の支配をスルターン・ブン・サイフ1世が公式に承認する形で終息したのだった。すでに別稿において述べたように、ハドラマウト地方を支配して同地方の国際交易港シフルから関税などの莫大な収益を得ていたムタワツキルにとって、ヤアーリバ朝に対する重要な軍事防衛線としてのズファール地方を完全に掌握したことは、シフル港を含むハドラマウト地方の経営の安全性を保障するものであったといえるだろう⁽¹⁷⁾。

ところが、イエメン側は陸域においてはこのように有利な立場を占めることができたものの、このズファール地方をめぐる問題が終息を迎える前後の時期から、イエメン近海付近の海域においてヤアーリバ朝勢力の伸張が次第にみられるようになっていた。そこで次節では海域からみた両国間の関係について検討してみたい。

2 ヤアーリバ朝の海洋活動とイエメンの対応

インド洋海域においてオマーンが古くから広域的な海洋活動を繰り広げていたことはよく知られている。それは17世紀に隆盛したヤアーリバ朝においても同様であり、スルターン・ブン・サイフ1世は1650年に、1507年以来ポルトガルが占拠していたオマーン最大の貿易港マスカト Masqaṭ の奪還に成功すると、ペルシャ湾海域における同王朝の海洋活動は急速に活発化していった⁽¹⁸⁾。

一方、イエメン近海では、二度にわたってアデン攻略に失敗したポルトガルに代わって、オランダがその商圈獲得を図って勢力を伸張しつつあり、時としてモカ港への攻撃なども挙行されていたものの⁽¹⁹⁾、同港をはじめとしてルハイ

(17) 拙稿「17世紀の南アラビア情勢とインド洋西海域」参照。

(18) ヤアーリバ朝および同王朝の海洋活動については、下記の諸研究に詳しい。

Miles, S. B., *The Countries and Tribes of the Persian Gulf*, 2vols., London, 1919, I, pp. 201-64; Risso, P., *Oman & Muscat: An Early Modern History*, London, 1986; Wilkinson, J. C., *The Imamate Tradition of Oman*, Cambridge, 1987; 福田安志「ヤアーリバ朝における通商活動とイマーム」『オリエント』第34巻第2号, 1991年, 74-92頁。

(19) オランダとイギリスが1070（または1071）/1659-60年に、モカ港を攻撃している。*Sīrat al-Mutawakkil*, ff. 110b. -112b. cf. Serjeant, *The Portuguese off*, pp. 117-20.

ヤ港、アデン港、シフル港などの紅海・アラビア海にあるイエメンの諸港の運営は、いまだにザイド派イマーム政権の掌握下にあった。

このようなインド洋西海域情勢にあつて、ヤアーリバ朝の海洋活動はペルシヤ湾海域のみならず、その西方のアラビア海や紅海の島嶼部、あるいはイエメン沿岸にまで及ぶようになっていた。たとえば、1085/1674年にオマーン船⁽²⁰⁾はアデン湾沖に浮かぶソコトラ島 (Jazīrat Suqṭrā) を襲撃して島民を殺害している。また、バーブ・アルマンダブ海峡付近のアーラ al-‘Āra を襲ったオマーン船は同地域の家禽を強奪して逃走したという⁽²¹⁾。さらに、イエメン沿岸にたびたび出沒していたオマーン船はアデンやモカなどのイエメンの主要港を襲撃し、1079年ズー・アルヒッジャ月1日/1669年5月2日にはあわせて7艘ほどのオマーン船籍の大型船 (birāsh) がアデンやモカの沖合に停泊し、特にモカについては同港の入り口を封鎖して船舶の出入港を妨害したのだった⁽²²⁾。このようなオマーン船の海洋活動の影響について『日誌』には、1089/1678年の箇条において、つぎのように記されている。

海においては、彼 (スルターン・ブン・サイフ1世) がイエメンの海岸に広がって、ムスリムたちの財産を略取し、そのことがこの数年間続いていたので、この結果、その略取の理由により、ハサーの諸地方やアジャムやインドあるいはそれ以外の諸地方に属する商人たちにとって、莫大な財産の損失が生じ、[さらに] この年、またはそのつぎの年のその方面におけるコーヒー豆の供給を切断したので、そのことゆえに、その年にアジャムやハサーの [商人たちの] 誰一人 [イエメンへ向けて] 出港しなかった。……また彼 (スルターン・ブン・サイフ1世) はバスラの航路やインドやイエメンへのバスラの通商を切断したのであった⁽²³⁾。

(20) *Yawmiyāt Ṣan‘ā’*, p. 234. cf. *Yawmiyāt Ṣan‘ā’*, p. 218. なお、本文で「オマーン船」と表記しているのは、明らかにヤアーリバ朝船籍の船であるが、史料では単にオマーン人たち (‘Umāniyūn) と記されているので、本稿ではこれを「ヤアーリバ朝船」とせず「オマーン船」と表記する。

(21) *Yawmiyāt Ṣan‘ā’*, p. 346.

(22) *Yawmiyāt Ṣan‘ā’*, p. 178.

(23) *Yawmiyāt Ṣan‘ā’*, p. 340.

これは、ムタワツキル死去から2年後の記事であるものの、史料中にはヤーリバ朝の海洋活動が「数年間続いていた」とみえることから、すでにムタワツキルの治世には、イエメン向けの貿易船を襲撃するオマーン船が出没し、インド、イラン、ペルシヤ湾西岸などの諸地方とイエメンとを往還する貿易船が途絶して、海上商人たちは多大な損害を被っていたと考えられる。オマーン船が襲撃していたこれらの貿易船のなかでも、とりわけ襲撃対象となっていたのは、バニヤ商人の貿易船であった。『日誌』には、1084年ズー・アルヒッジ月月末／1674年3月初頭の出来事として、以下のように記されている。

この月の終りに、つぎの知らせがアデン港やモカ港からサナアの商人たちへ届いた。すなわち、およそ12艘のオマーン支配者の大型船 (barsha) が2つの港の海岸の近海に到着し、その後、バーブ・アルマンドブ [海峡] へ引き返した。彼らは、海を往還する小商人たちを襲撃して損害を与える有様であった。さてさて彼ら (小商人たち) のなかのおよそ200人が、彼らの到来以前にモカに入った。そして彼らの携えてきた商品であるナツメヤシの実やそれ以外の彼らが隠し持っていた物をひろげたのであった。その後、オマーン人たちは商人たちを追跡し、彼らの狙いが異教徒に属するバニヤたち (bāniyān) であるということが、オマーン人たちの状況から明らかになったのである⁽²⁴⁾。

バニヤとは一般に、ムガル朝統治領域下のグジャラート Gujarāt 地方出身のジャイナ教徒、ヒンドゥー教徒の商人カーストに属する人びとの総称である⁽²⁵⁾。17世紀のイエメンにはこのバニヤ商人たちが多数、来航し居留して活発な商業・貿易活動を展開していたことから、イエメン向けの彼らの貿易船は相当数にのぼっていたと推測できる⁽²⁶⁾。「彼らの狙いが異教徒に属するバニヤ商人た

(24) *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, pp. 232-3.

(25) 長島弘「ムガル帝国下のバニヤ商人——スーラト市の場合——」『東洋史研究』第40巻第4号、1981年、86頁。

(26) いつ頃からバニヤ商人がイエメンにて活動していたのかは明らかではないが、最も早い時期の記録 (*Ta'rikh Thagr 'Adan*, II, p. 155) によると、すでに14世紀中葉のラスール朝統治下のアデンにバニヤ商人の街区 (*ḥāfat al-bāniyān*) が形成されていたことが分かる。17世紀のイエメンにおいては「インドのブラーフマ (パラヒ

ち」であったとあるように、バニヤ商人たちが非ムスリムであったことも彼らの貿易船が、オマーン船の標的となった一因であったと考えられる⁽²⁷⁾。当時、イエメンに來航したバニヤ商人たちが大挙してムタワツキルのもとを訪れ、インドからイエメンへ向けて航海中のバニヤ商人の貿易船を狙ってオマーン船が攻撃していると報告し、さらにスルターン・ブン・サイフ1世がイエメン沿岸諸地域の略取を画策していることを説明して、バニヤ商人の航行ルートの保全をムタワツキルに上訴していたが⁽²⁸⁾、このことは、まさに彼らが標的となっていたことの証左であったといえるであろう。

こうしたヤアーリバ朝の海洋活動はイエメン側にも大きな影響を及ぼすこととなった。それは『伝記』にみえる「イマーム＝ムタワツキル政権にとって財政上の重要な三本柱は、地租 (kharāj), 人頭税 (jizya), そして諸港から産み出される物であった」という記事からも明らかである⁽²⁹⁾。すなわち、地租や人頭税とならんでイエメンに來航する海上商人たちがもたらす商品や物産、あるいは彼らから徴収する関税をはじめとした諸々の税収入が政権財政を支える重要な財源の一つであったために、イエメン向け貿易船の通航妨害は税収の減少を

マ barāhuma) に属するバニヤの集団 (tā'ifa)」とみなされ (*Sīrat al-Mutawakkil*, f. 43b), イエメン各地に数千人が居留・滞留するようになっていた (*Sīrat al-Mutawakkil*, f. 44a)。この時期のイエメンにおけるバニヤ商人の商業・貿易活動に関する史料は数多く見出されるが、彼らのイエメンでの活動を端的に示す記事として、たとえば「インドのブラーフマに属するバニヤの集団は、彼ら自身や彼らの財産に対する安全保障 (amān) と、彼らや彼ら以外に与えられた公正 ('adl) ゆえに、イエメンにおいて多くなった。それゆえ [イエメンの] 陸や海、平原や山岳において、彼らがない都市や市場 (aswāq) は少なくなったのであり、そうしてついに彼らはシャハーラの市場に定着するようになり、人びとは彼らから [商品] を購入したり、金を借りたり (istadān) するために、あるいは彼らの財産におけるムラーバハ売買 (murābaha) をするために、彼らを頼りにするようになったのである。」とあり (*Sīrat al-Mutawakkil*, f. 43b), 17世紀のイエメン社会経済にとってバニヤ商人たちが欠かすことのできない存在であったことが分かる。なお、ムラーバハ売買とは「目的物の仕入れ値に一定の利潤を上乗せして転売する契約」のこと (柳橋博之『イスラーム財産法の成立と変容』創文社, 1998年, 52頁)。

(27) *Yawmīyāt Ṣan'ā'*, pp. 352, 357. ダース・グプタは、ヤアーリバ朝はグジャラート船 (Gujarati Ships) をしばしば標的としていたと述べている。Das Gupta, Ashin, *The World of the Indian Ocean Merchant 1500-1800*, Oxford, 2001, p. 82

(28) *Yawmīyāt Ṣan'ā'*, p. 231.

(29) *Sīrat al-Mutawakkil*, f. 162a.

招き財政の健全性を損ないかねない深刻な問題であった。

それでは、このようなヤアーリバ朝による海洋活動に対して、イエメン側はどのように対応していたのであろうか。

モカやアデンなどイエメン主要港を統括していたザイド派イマーム政権の総督たちは平時において、入出港する貿易船の臨検を通じてその船籍・積荷・乗員・乗客など貿易船の管理を徹底し、同時に大砲を装備した巡視艇によって周辺海域に出没する不審船の警戒や侵犯船の拿捕を実施していた⁽³⁰⁾。また非常時においては、主要港の港湾部への軍の派遣や駐留兵力の増強を暫時推し進め、大砲などの武器類を拡充するとともに、港湾入り口において洋上から侵入するオマーン船を迎撃するための軍事要塞の建設や改修工事をたびたび遂行して、港湾機能の充実とその防衛能力の強化に努めていた⁽³¹⁾。さらに財政面においては、イエメンに居住するユダヤ教徒やキリスト教徒などのジンミー（dhimmī）の所有財産に対して新たに課税して、軍事費用の捻出を試みていたのだった⁽³²⁾。

しかしながら、これらのイエメン側の措置は、必ずしも十分な成果をあげることができなかったようである。『日誌』には、つぎのようにある。

ムハッラム月の終りに、つぎの情報が届いた。すなわちモカの近海に1艘の平底船（jalaba）が出現し、ちょうどその時にアデンとモカの支配者の書簡が「イマームのもとに」到来した。曰く「オマーン船籍の数艘の平底船がバーブ・アルマンドブ〔海峡〕において貿易船団（mawsim）の航路切断（すなわち襲撃）を求めており、そして彼らオマーン人たちはその数が多くなり続けていて、ついには彼らの平底船は20艘以上に達するようになった」と。そこでマフディーは「ティハーマやイエメンの諸港に駐留する軍は、彼らにおいて諸々の港を防備するには十分である。とりわけモカは軍の施設〔の存在〕ゆえに。しかし一方で、海について言えば、彼ら軍に

(30) 拙稿「17世紀の南アラビア情勢とインド洋西海域」、300-5頁参照。また、従前の研究ではザイド派イマーム政権は海軍力を保持していなかったとされているが（Serjeant, “Omani Naval Activities off”, p. 77）、史料には大砲を装備した巡視艦の配備が記されている（*Strat al-Mutawakkil*, f. 132b; *Yemenite Embassy*, p. 91）。

(31) *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, pp. 196, 206, 246, 268, 355.

(32) *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 267.

は能力はないのだ」と言った⁽³³⁾。

この記述は、ムタワッキルの次にイマーム位に就いたマフディー al-Imām al-Mahdī li-Dīn Allāh Aḥmad b. al-Ḥasan（在位1087-92／1676-81年）の治世初頭の状況を伝えたものであるが、これによれば、港湾防備のための派兵は可能であったものの、オマーン船に備えるイエメン側の海軍は十分ではなく、軍事的にはオマーン側と比していささか脆弱であったことがうかがえる。また『伝記』には、ムタワッキルの言葉として、「イエメン [の財政状況] は困窮しており (ḥaqīr), その諸々の税 (wājibāt) は、軍のために用いることに関しては、僅かなのである。イエメンの支出は、軍が必要としているところに応じるには不十分である。すでにイエメンの収益の総計は、軍のために用いられるところ達しており、大いに足りないのである」と記されている⁽³⁴⁾。ジンミーへの新たな課税による税収の確保を図りつつも、この記事にみえるように、兵力の増強に充当する費用を捻出することが困難な財政状況もまた、オマーン船への対応に関する軍事的な不備の一因であったと考えられる。

以上のように、イエメン近海におけるオマーン船、すなわちヤアーリバ朝の海洋活動は1080／1669年前後に活発化し、イエメン諸港や沿岸地域、あるいは来航する貿易船を襲撃していた。とりわけイエメンに多く来航・居留していたバニヤ商人の貿易船はオマーン船の襲撃対象となり、イエメン側は大いに損害を被ることとなった。このようなヤアーリバ朝の海洋活動に対してムタワッキルはさまざまな防衛策を講じていたものの、いずれも十分な成果をあげることはできなかったのである。

2 サファヴィー朝との関係

隣国ヤアーリバ朝とズファール地方をめぐって対立関係にあった時期とほぼ時を同じくして、ザイド派イマーム政権とインド洋西海域世界の大国イランの

(33) *Yawmīyāt Ṣan'ā'*, pp. 344-5.

(34) *Sīrat al-Mutawakkil*, f. 185b.

サファヴィー朝との間においては、両国関係の形成に向けた活発な動きがみられるようになっていた。この動きは恐らく、ペルシャ湾やアラビア海で次第に台頭しつつあったヤアーリバ朝の動向に刺激されたものであったと推測される。

そこで本章では、この17世紀におけるサファヴィー朝との関係がどのようにして形成され、そしてその関係がイエメンにとって如何なる意味をなしていたのかを検討してみたい。

サファヴィー朝との最初の接触は、オスマン朝がいまだにイエメンに進駐していた時期のことであった。それは、イマーム＝ムアッヤド al-Imām Mu‘ayyad bi’llāh Muḥammad（在位1029-54／1619-44年）の治世初頭にあたり、史料には自らがイエメンのザイド派イマームに即位したことを宣言する書簡をシャー・アッパース 1 世 Shāh ‘Abbās I（在位978-1038／1571-1629年）へ送付したという記録が見出される⁽³⁵⁾。しかしこの書簡の送付後、イエメンとサファヴィー朝との間で書簡の交換や外交使節の往還が実施されたという記事は残っておらず、果たして両国間に公的な交流関係があったのかは判然としない。

『伝記』の著者ジュルムージーによるもう一つの著作である『ムタワッキル伝における諸情報の驚異に関する見聞の贈物（*Tuhfat al-Asmā’ wa al-Abṣār bi-Mā fi al-Sīrat al-Mutawakkiliya min Gharā’ib al-Akḥbār*）』には、1061年シャッワール月／1651年9月中旬付の、シャー・アッパース 2 世 Shāh ‘Abbās II（在位1052-77／1642-66年）へ宛てたムタワッキルの親書の写しが収録されている⁽³⁶⁾。きわめて長文であるこの親書は、修飾表現を多用した挨拶文によってその大部分が占められているものの、以下に引用するのは、そのなかで両国関係について言及していると考えられる部分の抜粋である。

……私たちのこの親書を運ぶ者であるサフィー・アッディーン Ṣafī al-Dīn が [先に] 私たちのもとに到着した時、いと高きアッラーが私たちやあなた様そしてムスリムたちに恩恵をお与え下さるところのもので、かつて [あなた様の支配] 領域から出ていたカンダハールの地域 (Bilād

⁽³⁵⁾ *al-Jawhara*, pp. 138-141.

⁽³⁶⁾ *Tuhfa*, ff. 14a -15a.

Qandahār) を、あなた様が再び征服されたことが、私たちにとって明らかとなりました。……この地位の高貴なる者 [であるあなた様] へ宛てた私たちのこの書簡は、あなた様のご同情を [私たちが] 切願していることを表しているのであります。……⁽³⁷⁾。

カンダハールはインドとイランとを結ぶ内陸交通上の重要拠点ゆえに⁽³⁸⁾、サファヴィー朝とムガル朝が多年にわたってその領有をめぐり衝突を繰り返した地域であり、アッバース 2 世は1058/1648年にこの地の奪還に成功していた⁽³⁹⁾。ムタワッキルの親書をアッバース 2 世へ届けたサフィー・アッディーンなる人物の経歴は不明だが、ムタワッキルがこの人物からカンダハール再征服の情報を聴取していることから判断すると、カンダハールを再征服した年以降にはすでに、両国間において外交使節の往還ないし書簡の交換がおこなわれていた可能性も考えられる。いずれにせよ、ムタワッキルがアッバース 2 世の「同情を切願」することによって、その理由は明らかではないものの、サファヴィー朝との良好な関係の構築をイエメン側が求めていたことは、この親書によって確認することができるだろう。

こうしたイエメン側の要望に対してサファヴィー朝が明確な回答をしたという記録は史料上、見出すことができない。しかしながら、イエメン側では当時、タブリーズ Tabrīz やラーヒジャーン Rāhijān などのサファヴィー朝治下のイラン情勢に関わる幾つかの情報を積極的に収集していることや⁽⁴⁰⁾、さらに右に引用した親書送付のおよそ10年後にあたる1073/1663年には、以下にみるように、

(37) *Tuhfa*, f. 14b.

(38) インド・イラン間内陸交通路については、下記の研究を参照した。Dale, S. F., *Indian Merchants and Eurasian Trade, 1600-1750*, Cambridge, 1994, pp. 45-55.

(39) Riazul Islam, *Indo-Persian Relations: a Study of the Political and Diplomatic Relations between the Mughal Empire and Iran*, Teheran, 1970, pp. 110-16; Roemer, H. R., "The Safavid Period", ed. Peter Jackson and Laurence Lockhart, *The Cambridge History of Iran*, vol. 6, Cambridge, 1986, pp. 299-300. またサファヴィー朝とムガル朝との国際関係については、以下を参照。羽田正「西アジア・インド国家体系」『講座世界史 2 近代世界への道 変容と摩擦』歴史学研究会編、東京大学出版会、1995年、75-109頁。

(40) *Ṭabaq*, p. 153; *Yawmīyāt Ṣan'ā'*, pp. 51, 113.

両国間で往復書簡が取り交わされていることから判断すると、両国の交流関係はすでに、1061/1651年のアッバース2世宛での親書発送以後に形成され、存続していたとみなしてよいと考えられる。

イエメンの歴史家アブー・ターリブ Abū Ṭalīb (1170/1757年歿)は、その1073/1663年の往復書簡について、以下のように記している。

この年に、イマーム [=ムタワツキル] は、アジャムのスルタンであるシャー・アッバース・ブン・サフイー・シャー Sultān al-‘Ajam Shāh ‘Abbās b. Ṣafī Shāh に対して、協定 (mu‘āhada) と親愛の情を含む書簡を書きました。するとシャーは、完全なる親愛と、分別を超越した深遠なる親交を呼びかけることで、[これに] 応じたのでありました⁽⁴¹⁾。

この記事は、ムタワツキルが何らかの事案に関わる「協定」をアッバース2世へ提案し、アッバース2世がこれに同意したことを伝えている。この「協定」の存在を示唆する記事は他の複数のイエメン側史料に散見するため、何らかの「協定」が双方の間で取り交わされていたことは確認できる。しかしながら、いずれの史料もその内容を伝えてはおらず、両国間で如何なる事案に関する「協定」が合意に至ったのかは明らかではない。

ところが、『日誌』の1076年シャーバーン月/1666年2月の箇条には、1073/1663年の往復書簡に記載された「協定」に関連すると思われる記事が、つぎのように記されている。

その年のシャーバーン月に、アフマド・ブン・アルハサン Aḥmad b. al-Ḥasan がハーリド al-Khārid から、[イマームの] 御所へ向かいしました。そうして彼は、イマームが望んでいることを彼に尋ねた後に、ハブール Ḥabūr にいるイマームと合意したのです。その望んでいることとは、十二イマーム派のシャー・アッバース・ブン・フサイン・ブン・シャー・アッバースの返答 [について] でありまして、その返答とはかつて、[10] 73年の終わりにダウラーン Ḍawrān にいたイマーム＝ムタワツキルが彼へ書いた [書簡に対する] 返答であり、彼 (シャー・アッバース) はその返答に、

(41) *Ta’rīkh al-Yaman*, p. 89. cf. *al-Shudhūr*, f. 23a; *Ṭabaq*, p. 190.

「私たちとあなた方との間には、ハワーリジュ [派] のオマーンの人びとに対抗する協力 (ta'awun) が取り決められておりますが、それは私たちとあなた方との間にオマーン人たちが占めているからであります。あなた方のなかには明晰さと、あなた方の側には彼らオマーンの人びとが企んでいる事に関わる計画があるでしょう。それゆえ、私たちは可能な限りの支援 (i'āna) によってあなた方を援助し、私たちは [私たちの] 能力に応じてそれら (オマーン) の諸地方を統治するでしょう」と記していたのでありました⁴²⁾。

ここに引用されているアッバース 2 世の返答こそ、まさに1073/1663年のムタワツキルの親書に対するアッバース 2 世の返書であろう。またその内容から、ムタワツキルとアッバース 2 世との間には、対オマーン政策に関わるこの「協力」関係が1073/1663年時点において成立していたことが分かる。つまり、この対オマーン政策についての「協力」関係こそ、まさにイエメン側より提案され、先のムタワツキルの親書に記載された「協定」に関わる事案の内容であったのである。

サファヴィー朝は17世紀初頭からペルシャ湾海域に対して強く関心を示すようになっており、アッバース 1 世は1601年にバフラインを併合し、さらに1622年にはイギリスの支援を受けてポルトガル支配下のホルムズ島を制圧すると、イラン側のゴムルーンに港湾機能に移してバンダル・アッバース Bandar 'Abbās を建設している⁴³⁾。またイエメン側では、すでに前章で述べたように、ヤアーリバ朝とズファール地方をめぐる対立関係にあった。このようなペルシャ湾およびアラビア半島の国際情勢を背景として、1073/1663年にムタワツキルが提案した、オマーンへの対応を基調とするサファヴィー朝との協調体制が成立し、そしてこの体制にもとづいて、アッバース 2 世からイエメン側に対してオマーンへの軍事活動の提案が示されたと考えることができるだろう。

さて、このアッバース 2 世による提案について、イエメン側の対応は1076/

⁴²⁾ *Yawmīyāt Ṣan'ā'*, p. 135. cf. *al-Shudhūr*, f. 23b.

⁴³⁾ 羽田正「バンダレ・アッバースとペルシャ湾海域世界」『歴史学研究』第757号、2001年、1-11頁。

1666年に、イマーム＝ムタワッキルの御前会議で協議された。『日誌』には、以下のように記されている。

その後、この当時、イマームの御前に列席していた或る者が以下のことを示唆した。……すなわち「もし、シャーの兵たち (junūd al-Shāh) がオマーンの地へ達してその地方へ入り、その方面およびそれ以外のところを支配したとしたら、彼らは『その（オマーンの）地方はわれわれの地であり、われわれの勝利によってわれわれがその地に入ったのだ』と言うだろうし、そうして彼らの旗印と宗派 (madhāhib) をその地において宣言することになり、その後、彼らは彼らにそれぞれ接する所を求めるようになるだろう。それゆえ第一になすべきことは、この〔シャーからの〕情報を隠すことと、彼がすでに書き記している事態に従事するのを拒絶するということです。そうして、もし軍を、あなた様がイエメンからオマーンへ必要とする支援物資とともに派遣されるとしたら、このことゆえに国庫の大半は費やされ、あなた様の軍はオマーンの諸地方で無秩序をなし、イエメンにおいては混乱が発生して、イエメンの有力者たちの多くが、この時代の人びとの習いであるように、蜂起するでありましょう。その後、さまざまな事がいろいろな部分において現れることでしょう。それゆえ、あなた様は、それぞれのことから距離をとることによって、彼（アッバース2世）が推し進めていることを承認すべきではないのです」。……さて、そこでイマームの御前に臨席していた首脳たちはこのことを要請する返書と、その返書をかの地へ送付することに合意した。すなわちイマームは「私たちがオマーン人たちの狙いを見出し、彼らに対して蜂起するならば、あなた様からの支援を必要とすることでしょう。しかしながら、私たちがあなた様に対して明らかにすることとは、このお話をお断りすることにあります。アッラーがその地方と人びとを良くされますよう」と返答をしたのであった⁽⁴⁴⁾。

この記事をまとめると、イエメン側がサファヴィー朝によるオマーンへの軍

(44) *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, pp. 135-6.

事活動の提案を了承した場合、対外的には同王朝がオマーンへ侵攻すれば、その領有を主張してイエメン側へも侵出してくる可能性があり、また国内情勢においてはオマーンへの派兵が国庫を疲弊させ、イエメンの地方有力者たちの蜂起を誘発しかねないことから、アッバース2世の提案の受け入れを断念した、ということになろう。イエメン側が提案を退けた上記理由の背景には、1070／1660年以降ズファール地方をめぐる生じていたオマーンとの軍事的な対峙が1076／1666年の段階においてはすでに小康状態にあったために、オマーンへの早急な軍事的対応の必要性が相対的に低下していたこともあったと考えられる⁽⁴⁵⁾。ただし、この時点でイエメン側が、将来においてオマーンとの有事が発生した際には、サファヴィー朝の支援を必要とするだろうとして、同王朝との協調体制を完全に解消しなかった点は、留意すべきであろう。

ところが、このイマームの御前会議の翌1077／1666年になると、アッバース2世死去の知らせがイエメン側にも伝わり⁽⁴⁶⁾、これにともなって、オマーンへの対応を基軸としたサファヴィー朝との協調体制も終焉を迎えることとなった。それは、アッバース2世の死去はもとより、その歿後、軍隊内部での対立や官吏のモラルの低下や宮廷歳費の増大などのさまざまな要因により⁽⁴⁷⁾、サファヴィー朝が次第に凋落していったことと無関係ではないとも考えられるが、いずれにせよ、イエメン側からもサファヴィー朝との公的関係の再興に向けた働きかけはその後実施されることなく、両国の交流関係は途絶えることになったのである。

以上のように、サファヴィー朝との関係は、ムタワツキルがサファヴィー朝との通交関係を求めて、アッバース2世との関係形成の成功を契機として始まったが、この両国の修好関係の根底には、ヤアーリバ朝の軍事的伸張を懸念していたイエメンと、ペルシャ湾海域への強い関心を示していたサファヴィー朝

(45) 本稿第1章1節にて検討した。あわせて拙稿「17世紀の南アラビア情勢とインド洋西海域」、292-4頁も参照のこと。

(46) *al-Shudhūr*, f. 25b; *Ṭabaq*, p. 219.

(47) 永田雄三・羽田正『世界の歴史15 成熟のイスラーム社会』中央公論社、1998年、409頁。

との間において、ヤアーリバ朝への対応に関する双方の思惑の一致があり、それゆえに両国間においてヤアーリバ朝に対する協調体制が成立したのであったといえるだろう。結果的には、シャー・アッバース2世の死去に伴い、両国関係は長くは存続しなかったものの、ヤアーリバ朝と対立関係にあったイエメン側にとって、同王朝への対応を基軸として構築し得たサファヴィー朝との修好関係は、きわめて重要であったといえることができるだろう。

3 ムガル朝との関係

1 ムガル朝との通交関係の形成

サファヴィー朝と並ぶインド洋西海域世界のもう一つの大国は、言うまでもなく、インドのムガル朝であり、イエメン側の諸史料にはこのムガル朝との関係を伝える記事もまた見出される。イエメンは、前章において確認したように、オマーンへの対応を基調とした修好関係をサファヴィー朝と取り結んでいたが、それでは、このサファヴィー朝との関係とほぼ同じ時期にみられたムガル朝との関係もまた、オマーンへの対応をもとにしたものであったのだろうか。

そこで本章では、まずムガル朝との関係の構築を分析し、ついで両国関係の展開とその意味について考察して、ムガル朝との関係がいかなるものであったのかを検討してみたい。

オスマン朝勢力の撤退後、ザイド派イマーム政権下のイエメンとムガル朝との関係が最初に認められるのは、イマーム＝ムタワツキル政権期からであった⁴⁸。『伝記』によると、ムガル朝第5代皇帝シャー・ジャハーン *Shāh Jahān*（在位1037-68／1628-57年）のワズィールの一人がシャー・ジャハーンの手簡と贈呈品を携え、1065／1654-5年のメッカ巡礼の途上ムタワツキルのもとに参内し、これを契機としてその後、両者の間で数次にわたって手簡が交換されたと

48) なお、いまだオスマン朝がイエメンを支配していた1028／1619年に、ムガル朝よりイエメン駐留のオスマン朝のバシヤに対して莫大な贈物を携えた使節が派遣されたとの記録はすでに存在する (*Ghāyat*, II, p. 813)。

ある⁽⁴⁹⁾。如何なる書簡が両国間で往還したのかは判然としないものの、『日誌』によれば、すでにこの翌年の1066/1655-6年にはオスマン朝へ派遣されていたムガル朝遣使が帰途イエメンに立ち寄り、イエメン側へ派遣目的とその成果を伝えていることから⁽⁵⁰⁾、両国間の友好的な関係の萌芽はおおよそこの時期に形成されていたと判断してよいだろう。

シャー・ジャハーンの後継者として第6代皇帝となったアウラングゼーブ Awrangzib (在位1068-1118/1658-1701年)は、その50年に及ぶ長い治世において、ムガル朝の最大支配領域を実現した君主であった⁽⁵¹⁾。『伝記』によると、このアウラングゼーブに仕えていた人物の一人がメッカ巡礼の帰途、イエメンに一時滞在してムタワッキルの知遇を得た後、1068/1658年に帰朝したと伝えられている⁽⁵²⁾。ムタワッキルは、この人物がインドへ帰還する際に、アウラングゼーブへの贈呈品とともに彼へ宛てた親書を託しており、この親書の写しは同じく『伝記』に収載されている⁽⁵³⁾。これによると、親書はコーランの章句を多用した長文であり、イエメンやインドに関わる具体的な言及はほとんどなされていないものの、その末節には以下のような一文がみえる。

……さて、アッラーが私たちにおおくり下さったあなた様に、そしてアッラーがあなた様におおくり下さった私たちに、アッラーのたたえあれ。アッラー [の名に] にかけて、私たちとあなた様とが共に友好によって取り結ばれ、また私たちとあなた様とが相互に書簡を交換し合い、そして私たちとあなた様とが互いに傍らにるように、アッラーがして下さること

(49) *Sīrat al-Mutawakkil*, f. 104b. この時のワズィールの名前はカーイム・ベク Qā'im Bek と記されているが、このカーイム・ベクは1656年5月3日にイスタンブールに到着し、帰途アレppoで殺害されたという。Farooqi, N. R., *Mughal-Ottoman Relations: A Study of Political and Diplomatic Relations between Mughal India and the Ottoman Empire, 1556-1748*, Delhi, 1989, pp. 36-7.

(50) *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 90. cf. *Ṭabaq*, p. 144.

(51) アウラングゼーブに関しては、つぎの研究に依拠した。Sarkar, J., *History of Aurangzib*, 5vols., Calcutta, 1912-28 (rep. 1972-74).

(52) *Sīrat al-Mutawakkil*, f. 91b.

(53) *Sīrat al-Mutawakkil*, ff. 91b-93b; *Tuhfat*, ff. 106b-108b. 写本の大きさは縦29.6センチメートル、横21センチメートルで、各葉27行より構成されている。

を、私たちは希求しているのです。……⁵⁴⁾

この記述から、アウラングゼーブに対して相互交流の実現と、それに基づく対等な関係の形成およびその継続を求めるムタワッキルの外交的な意図を読み取ることができる。ただし、親書の日付は1068年シャッワール月／1658年7月とあり、それはアウラングゼーブが正式に皇帝に即位する以前のことであった⁵⁵⁾。加えて、すでに皇帝シャー・ジャハーンとは数回の書簡の往還に基づく公的な関係が存在していたことから、この親書を送付する時点では、ムタワッキルはアウラングゼーブをムガル朝皇帝としてではなく、あくまでもシャー・ジャハーンと縁のあるムガル朝皇族の一人としてみなしていたと考えるべきであろう。

さて、このムタワッキルの親書送付から2年後の1070／1659年に、アウラングゼーブより発給された書簡を携えたムガル朝使節がイエメンを再訪した。『伝記』に収録されたこの書簡の写しには、ムタワッキルの親書をアウラングゼーブが受領した旨が明記されており⁵⁶⁾、この書簡が先の親書の返書に相当することが分かる。しかし、この返書にはムタワッキルが要請している通交関係の形成に関する記載はなく、具体的な記述としては唯一、つぎのような描写がみえるのみである。

……シャー・ジャハーンは1067年ズー・アルヒッジャ月に大病を患い、その大病は彼の判断による統治を混乱させ、彼の支配を脆弱なものにしてしまいました。……それゆえ彼（アウラングゼーブ）は彼自身の望みにより、司令官たちと、彼ら司令官たちが心密かにあるいは公に切望していること、諸々の軍団の將軍たちと兵士たちの指揮官たちを掌握すること、そして奴隸たち、従者たち、衛兵たちを〔アウラングゼーブ側へ〕傾倒させることを開始したのです。そうして彼（アウラングゼーブ）は統治の中枢とスルタ

⁵⁴⁾ *Sirat al-Mutawakkil*, f. 93b; *Tuhfat*, f. 108a.

⁵⁵⁾ アウラングゼーブは1658年7月21日に、デリーで暫定的に即位し、翌1659年6月5日に正式に戴冠した。近藤治『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会、2003年、478頁。cf. Sarkar, *History of Aurangzib*, II, pp. 277-8, 381; Richards, J. F., *The Cambridge History of India, The Mughal Empire*, Cambridge, 1993, p. 161.

⁵⁶⁾ *Sirat al-Mutawakkil*, f. 97b; *Tuhfat*, f. 111a.

ン位を統御し、諸政策の施行と帝国の行政を実施して、他の全ての兄弟たちの打破と彼自身のために財産を捧げること、歩兵たちや騎兵たちを統制すること、彼らを各地へ派兵することに尽力したのです。……⁵⁷⁾

この返書の末尾には1070年ラビー・アッサーニー月／1659年12月中旬と付されており、シャー・ジャハーン後の皇位継承をめぐるアウラングゼーブを含む4人の息子たちが相互に抗争を繰り広げ、3兄弟の勢力を凌駕したアウラングゼーブが戴冠（1659年6月5日）した直後の時期に、この返書が起草されたことが分かる⁵⁸⁾。このことから、先に引用したアウラングゼーブの返書には、自身の皇帝即位までの経緯を叙述することによって、ムガル朝第6代皇帝としての自らの正統性をムタワッキルへ誇示するアウラングゼーブの対外的な意図が込められていたと考えられる。ただし、すでに触れたように、この返書にはムタワッキルが求める関係形成について何ら言明されていない。しかしながら、返書と共にアウラングゼーブから贈られた20頭の馬（*barādhin*）をはじめとするインド産の珍奇な贈呈品の数々は、良好な通交関係の形成を希求するムタワッキルの要請を、ムガル朝皇帝としてアウラングゼーブが正式に応諾したことを明示する、いわば贈答品であったと考えられる⁵⁹⁾。また、先の返書を送付することによってシャー・ジャハーンの帝位を継承した皇帝としての自らの正統性を表明したという事実こそ、ムタワッキルの要請に応じたことを明瞭に示しているといえるだろう。

さて『日誌』には、1070年／1659年のアウラングゼーブの返書を受領したムタワッキルがその2年後の1072／1662年に、アデンに駐留する甥のアフマド・ブン・アルハサン *Aḥmad b. al-Ḥasan* を介して、8頭の馬匹（*khayl*）からなる

57) *Sīrat al-Mutawakkil*, f. 97b; *Tuhfat*, ff. 111a-b.

58) 近藤前掲書『ムガル朝インド史の研究』, 157-63頁。cf. Sarkar, *History of Aurangzib*, II, pp. 165-389; Richards, *The Cambridge History of India*, pp. 151-64.

59) *Yawmīyāt Ṣan'ā'*, p. 111. なお、『日誌』ではこのムガル朝使節が1071／1659年に来朝したとあるが、正確にはその1年前の1070／1660年にイマームのもとに来訪し、その後メッカ巡礼に向かい、その途上イエメンのヤリームで罹患・死亡したのが1071／1661年である。死亡した年を基準として使節が来訪した時期を一括したために年代が1年ずれたと考えられる。

贈物と共に、遣使をアウラングゼーブのもとへ送ったことが記されている⁶⁰⁾。この遣使が如何なる理由で派遣されたのかは史料に伝えられていない。しかしながら、先にアウラングゼーブへ宛てた親書が彼の戴冠以前ののものであったにもかからず、友好関係を要請していたことに加えて、この遣使が「インドのスルタン (Sulṭān al-Hind)」であり「インドの王 (Malik al-Hind)」としてのアウラングゼーブに向けて派遣され、数年間にわたる歓待を受けた後に答礼品を携えて帰朝していること⁶¹⁾、さらにアウラングゼーブ時代の歴史書 (*Ma'āṣir-i 'Ālamgīrī*) にもこの遣使に関する記述がみえることなどから判断すると⁶²⁾、この遣使の目的は明らかに、先のムガル朝による使節派遣に対する返礼と、アウラングゼーブ戴冠への慶祝を表明することであったと考えられる。

以上のように、オスマン朝撤退後のイエメンでは、ザイド派イマーム＝ムタワツキルが書簡の交換によってシャー・ジャハーンの治世にムガル朝との関係形成の萌芽を見出し、さらにシャー・ジャハーン歿後に帝位を継いだアウラングゼーブと親書や使節の往還あるいは贈呈品の交換を経て友好関係が構築されるに至って、イエメンはムガル朝との本格的な通交関係を形成することに成功したのであった。

2 イエメンの親ムガル朝政策とその理由

前節で確認したように、ムタワツキルとアウラングゼーブとの友好関係が形成され、イエメンはムガル朝との通交関係を構築することに成功したが、イエメン側の諸史料には、ムタワツキルがムガル朝との通交関係を重要視し、その維持とさらなる発展を図っていたことを示す事例が多く見出される。

たとえば『伝記』によると、シャー・ジャハーンの高級官僚の一人がイエメンから紅海岸沿いに陸路でメッカ巡礼へ向かう際、ムタワツキルは紅海沿岸地域を統治する地方総督たちに対して、彼を「客分として歓待すること (diyāfa)」

⁶⁰⁾ *Yawmīyāt Ṣan'ā'*, p. 119. cf. *al-Shudhūr*, f. 22b; *Ṭabaqā*, pp. 183-4; *Ta'rīkh al-Yaman*, p. 87.

⁶¹⁾ *Yawmīyāt Ṣan'ā'*, p. 119.

⁶²⁾ *Ma'āṣir-i 'Ālamgīrī*, p. 32.

を厳命している⁶³。このようなムタワッキルの配慮に類する事例は史料において他に見出し得ず、恐らくムガル朝に対してのみ採られた特別な措置であったと考えられる。それは、中央アジアのカシュガル Kāshgar からウズベクのスルタン (Sultān Uzbek) がメッカ巡礼を志向して総員500名からなる警護兵や従者の一団と共にモカ港へ来航した折に、同港に駐留するイエメン軍との間で衝突が生じてウズベクのスルタン側に多数の負傷者が出たものの、ムタワッキルはそれに関して何ら対応策を講じなかったという事例と比較することによっても確認できるだろう⁶⁴。

さらに、ムガル朝に対するイエメン側の特別な配慮を示す、より具体的な事例として、つぎのような記事を見出すことができる。『日誌』によると、1071/1661年に巡礼途上のムガル朝使節がイエメンのある地方において死亡したが、その時彼が携行していた同王朝のメッカへの献呈品の処理に関して、つぎのようにある⁶⁵。

さて、イマーム [=ムタワッキル] は彼(死亡したムガル朝使節)のもとに、このことを調査するため、シャイフ・アブド・アッラヒーム・アルアフワリー al-Shaykh ‘Abd al-Raḥīm al-Ahwarī や彼以外の者を派遣した。そうして、彼らは彼のことを調査した。……その後、彼(アフワリー)は献呈品をもってサナアへ向かった。イマームは二聖都への献呈品を確保し、そうして献呈品はインドのスルタンの使者が到達するまでイマームのもとに留め置かれたが、その使者はイマームにそれを聖地へ送るよう命じ

⁶³ *Sīrat al-Mutawakkil*, f. 104b.

⁶⁴ *Tabaq*, p. 250; *Yawmiyāt Ṣan‘ā’*, p. 183.

⁶⁵ *Yawmiyāt Ṣan‘ā’*, pp. 111-2. なお、この使節の名は『日誌』では1070/1660年にイエメンに到来した、サイイド Sayyid のムハンマド・ブン・イブラーヒーム Muḥammad b. Ibrāhīm であり、『伝記』では同じくサイイドであるムハンマド・イブラーヒーム Muḥammad Ibrāhīm と記され、それぞれ名称は若干異なるものの、いずれも1071/1661年にイエメンで死亡している (*Yawmiyāt Ṣan‘ā’*, p. 107; *Sīrat al-Mutawakkil*, f. 91b)。またインド側の史料において、イエメン側の史料でムガル朝の使節として述べられているこの人物は、1659年11月にインドを出発したメッカ巡礼団の長で、巡礼途上の1661年6月に、「アラビア Arabia」で死亡したサイイドのミール・イブラーヒーム Mīr Ibrāhīm に比定される (*Ma‘āṣir-i ‘Ālamgīrī*, p. 17; Sarkar, *History of Aurangzib III*, p. 67)。

た。そこでイマームはそのことを実施し、この年の終りに彼（使節）が出立するときに、[本件を] 記録したものを彼に渡したのであった⁶⁶⁾。

ムガル朝の歴代皇帝がメッカへ多額の寄進をしていたことはよく知られているが⁶⁷⁾、この記事は、そうしたメッカへ送付されるムガル朝の献呈品がイエメンで滞った事態への対処を記したものである。これによればイエメン側では、支配領域内を通行していたムガル朝使節が何らかの事情によって死亡したという報告を受け、ムタワッキルはその実態の調査を実施すると共に贈呈品を確保・保管し、さらにムガル朝に代わってその献呈品をメッカへ送り届け、送付の完了を「記録したもの」をムガル朝側へ提出していたことが分かる。この類例は『日誌』の1083/1672年の箇条にもみえ、それによると、メッカのアミール・サアド・ブン・ザイド Sa'd b. Zayd への贈呈品を携行したムガル朝使節のウスマーン・ブン・アリー・アルハルビー 'Uthmān b. 'Alī al-Ḥalbī が何らかの事故によりイエメンにおいて滞っているとの報告を受けたムタワッキルが、「われわれは、それ（サダカ）をそれが送られるべきところへ送ろう」と述べメッカへ代送している⁶⁸⁾。ムタワッキルがとったこれらの措置はいずれも、ムガル朝のメッカへの献呈品がイエメンにおいて不当に滞ったのではなく、あくまでも事故であったことを弁明して証明するとともに、献呈品の確保と保管およびその代送という諸行為によりムガル朝への協力姿勢を明示することによって両国間の修好関係を重要視する、いわばイエメンの親ムガル朝政策を表徴するものであったといえるだろう。

なお、このような通交関係の維持と発展に関わるイエメン側の親ムガル朝政策に関して、それに呼応すると考えられるムガル朝の動向がイエメンにおいて確認される。『日誌』によると、1087/1676年にムガル朝からムタワッキルへの贈呈品やイエメンのシャリーフたちへのサダカ（ṣadaqat li-ashrāf al-Yaman）を積載した数艘のインド船がモカ港に入港したとある⁶⁹⁾。さらに同じ年のムタワ

⁶⁶⁾ *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 111.

⁶⁷⁾ Pearson, M. N., *Pilgrimage to Mecca: The Indian Experience, 1500-1800*, Princeton, 1996, pp. 105-21.

⁶⁸⁾ *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 212.

⁶⁹⁾ *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 270; *Ṭabaq*, p. 321. ただし、コーランによればサダカの対象

ツキル死去直後にも、アウラングゼーブからイエメンに在住するシャリーフへのサダカが贈られ、ムタワツキルの息子ムハンマド Muḥammad b. al-Mutawakkil Ismā'īl によって配分されたという記事もみられ⁽⁷⁰⁾、ムガル朝においてもイエメン側に対して好意的な対応を示していたことが分かる。

ところで、このような親ムガル朝政策を採択することにより、ムガル朝との友好的な関係の一層の緊密化が図られていたことは明らかであるものの、ここで、そもそもなぜイエメンはムガル朝との関係を求め、その維持と発展に腐心していたのかという疑問が生じる。換言すれば、ムガル朝との良好な関係を必要としたイエメン側には、如何なる理由があったのだろうか。

この問題を解明する糸口として、当時のイエメンを取り巻く国際情勢の検討が必要であろうと思われる。そこで当時のイエメン周辺の国際情勢に関連する記事をみると、『日誌』の1085/1674年の箇条には、つぎのようにある。

この年のラジャブ月に、東風が生じて、彼ら（オマーン人）にとって海面が穏やかになり、彼らの目的がモカやアデンの側へ至るイエメンの海岸であるという疑念が生じた時、オマーンの支配者は海に入り、彼らがマスカトから出帆したという知らせが〔イマーム＝ムタワツキルのもとに〕到来したのです。そしてその時、イマームとアフマド・ブン・アルハサンは彼らオマーン人〔の襲来〕についておおいに心配して疑っていたのです……さてさて彼ら（アデンおよびモカの人びと）はこの2年間、2つの方面を恐れ続けているのです。すなわちスルタン・ムハンマド・ブン・ウスマーン Sulṭān Muḥammad b. 'Uthmān⁽⁷¹⁾に属するシリアの方面であり、それ

者にシャリーフは入っていない。同様の史料を引用したサージェントもこのサダカについて何ら言及しておらず、このサダカをどのように解釈すべきなのかは、今後の課題としたい。cf. Serjeant, R. B., "The Post Medieval and Modern History of Ṣan'ā' and the Yemen, ca. 953-1382/1515-1962", *Ṣan'ā' An Arabian Islamic City*, ed. Serjeant, R. B. & Lewcock R., London, 1983, p. 81.

(70) *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 303. cf. *al-Shudhūr*, f. 38b.

(71) このスルタンは、同じ『日誌』においてスルタン・ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・ブン・アフマド・ハーン・ブン・ウスマーン Sulṭān Muḥammad b. Ibrāhīm b. Aḥmad Khān b. 'Uthmān とあり (*Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 143), スルタン・メフメト 4 世 Muḥammad IV b. Ibrāhīm (在位1058-1099/1648-1687年) を指していると考えられる。Bosworth, C. E., *The New Islamic Dynasties*, Edinburgh, 1996, p. 239.

はすでに述べたように彼が関心を抱いているのはイエメンへ向かうことであったからです。もう一つはオマーンの支配者であるヤアーリバ朝のスルターン・ブン・サイフの方面であります。というのもそれは昨年に発生したこと、そして彼の部下たちが現在においても遂行していること故だからです⁽⁷²⁾。

この記事は、ムタワッキルが病に倒れたという噂がイエメン各地に広がり、その支配領域内では混乱が続発したという内政的な不安の描写をうけて記されたものであり、それゆえ、当時のイエメンが憂慮していた対外的な情勢の実態を端的に描写しているものといえよう。

まず注目されるのは、この記事には西欧諸国の動向が記されていない点である。オランダは、オスマン朝がイエメンに駐留していた時期にはすでにパーブ・アルマンガブ海峡を突破して紅海に出現し、ザイド派イマーム政権期にはコーヒーをはじめとする交易活動の活性化を図ってイエメンの諸港への働きかけを強めていた。そのため、たとえば1070 (71)/1659-60年には、モカ港に居留し商業・交易活動に従事していたインド・ムスリム商人たちとオランダとの衝突が発生し、ムスリム商人側から同港におけるオランダの交易活動の規制の請願がなされると、イマーム政権のモカ総督はオランダの商品販売の禁止とムスリム商人との提携の停止などの規制措置を採り、あわせて同港の駐留兵力を増強してオランダ船への警戒を強めるといった事態もみられることとなった⁽⁷³⁾。しかしながら、このような事件の発生にもかかわらず、このオランダの動向だけでなくその他の西欧諸国について、先に引用した史料にみられるように、イエメン側の諸史料に特に記述がなされていないということは、当時のザイド派イマーム政権では恐らく、オランダをはじめとする西欧勢力をいまだ当面する脅威とは位置づけていなかったことを表しているように考えられる。

さて、そこで上に引用した史料を再度みると、エジプト、トルコ、シリア、イラクの広大な領域を支配していたオスマン朝と、イエメンの東隣に位置する

(72) *Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 234.

(73) *Sīrat al-Mutawakkil*, f. 111a.

ヤアーリバ朝とがイエメンの直面する対外的な脅威として想定されていたことが分かる。すでにイエメンから撤退していたオスマン朝に関しては、イエメンはその後もオスマン朝南下に対する危機感を常に抱いて軍事的、政治的刺激を忌避していたため⁽⁷⁴⁾、大きな軍事的衝突も無く平静な状況を保持し続けていた。一方ヤアーリバ朝については、すでに第1章において検討したように、同王朝との国境付近に位置するズファール地方の領有をめぐる軍事衝突や、同王朝の海洋活動の活発化に伴うイエメンの諸港・沿岸部への海賊行為の頻発など、恒常的な軍事的、政治的対立関係にあり、同王朝に対して警戒・臨戦体制をとらざるを得なかった。イエメンを取り巻く、このような当時の国際情勢に鑑みて、ムガル朝との良好な関係を望んだムタワッキルの外交的な思惑を分析してみると、恐らく対立するヤアーリバ朝との全面的な衝突が不可避となった場合に、イエメンに対するムガル朝の側からの何らかの支持が取り付けられることを期待していたのではないだろうか。この論拠の一つとして、当時、ハドラマウトへ派兵準備を進めていたヤアーリバ朝に宛ててインドあるいはイランから派兵すれば攻撃する旨の書簡が送付されたと『伝記』は伝えており⁽⁷⁵⁾、このことから、インドやイランなどの周辺諸地域がヤアーリバ朝の勢力拡大を必ずしも容認しておらず、ヤアーリバ朝との有事発生の際には少なくともムガル朝やサファヴィー朝がイエメン側を支持するとムタワッキルは判断していたのではないかと考えられるからである。

以上のことから、ムタワッキルがムガル朝との修好関係を形成して、その維持と発展に努めて親ムガル朝政策を採っていた根底には、当時イエメンにとって直面する脅威の一つであった隣国ヤアーリバ朝との有事に備えて、ムガル朝

(74) たとえば、隣国エチオピアへの軍事侵攻を画策していたが、サワーキンに駐留するオスマン朝軍を刺激しかねないとの政治的判断から、計画遂行を中止した経緯がある (*Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 66)。また、オマーン攻撃を目的として、イエメン北部からアラビア半島中央部を横断してトゥワイク山脈の南側を通してペルシャ湾西岸地域へ抜ける進行経路を開発していたが、バスラへ再進出してきたオスマン朝の動向を察知して、同経路を用いたオマーンへの侵攻を諦めたという記事もみられる (*Yawmiyāt Ṣan'ā'*, p. 136)。

(75) *Sīrat al-Mutawakkil*, f. 84a.

側からの支持を得ようとする必要性が認められたからであると解することができる。

お わ り に

本稿では、17世紀のインド洋西海域世界におけるザイド派イマーム＝ムタワツキル政権期のイエメンの対外関係について、主に軍事的、政治的な観点から、その全体的な構造の俯瞰を試みた。

ムタワツキルは、ヤアーリバ朝との軍事的、政治的対立関係の一因であったズファール地方の領有に成功することによって、ハドラマウト地方の経営の安全性を獲得したものの、その一方でイエメンに來航する貿易船や諸港を襲撃するヤアーリバ朝の海上活動については十分に対処することができなかった。

一方、このヤアーリバ朝との緊張関係が高揚していた時期、ムタワツキルはサファヴィー朝のシャー・アッバース2世との数次にわたる親書の交換によって友好的な関係の構築に成功し、ヤアーリバ朝への対応をめぐって同調した両国は、対オマーンへの協調体制をとるに至った。なおその後、この協調体制に基づいてサファヴィー朝側からオマーンへの軍事侵攻に対する軍事支援の要請を受けたイエメン側では、サファヴィー朝の軍事的伸張と自国の政治的、財政的懸念により、軍事支援要請は断ったものの、協調体制自体はアッバース2世が死去するまで継続したのであった。

サファヴィー朝との協調体制を築く一方でムタワツキルは、皇帝シャー・ジャハーンの治世期におけるムガル朝と関係形成の萌芽をみると、つぎの皇帝アウラングゼーブの統治期において、数次にわたる親書や使節の往還をとおして、ムガル朝との実質的な通交関係を形成することに成功したのだった。加えてムタワツキルは、この通交関係のさらなる発展を求めてイエメンに來訪したムガル朝関係者を優遇・保護するなど、いわば親ムガル朝政策を採っていたが、それは、当面する脅威として対立関係にあったヤアーリバ朝について、同王朝との有事の際にはムガル朝からの支持を取り付けたいとする思惑が、その根底にあったからである。

以上のように、総じて、17世紀のインド洋西海域世界におけるイエメンの対外関係とは、軍事的対立関係にあったヤアーリバ朝の活性化に対する軍事的、政治的な対応を基軸として、サファヴィー朝ならびにムガル朝との通交関係が形成、展開されていた、ということができらるだろう。

ところで本稿では、15世紀末以降インド洋海域に進出していた西欧諸国の動向とイエメンとの関係に関してほとんど言及し得なかったが、当該時期のポルトガルやオランダとの関係については一瞥しておく必要がある。15世紀末にアフリカ最南端を回ってインド洋に至ったポルトガルは、南アラビアに活動拠点を求めたものの、16世紀初頭に二度アデン攻略に失敗した後はイエメン近海域に拠点を設けることなく、インド洋海域における彼らの活動の重心を紅海海域よりもペルシャ湾海域へと次第に移行していった⁷⁶⁾。しかし、ポルトガルによる攻撃をうけたアデン港はその後、オスマン朝勢力の進駐と圧制をうけて機能不全に陥り、国際交易港としての昔日の繁栄を失うことになった。一方、16世紀末にインド洋に出現し、ポルトガルに続いてイエメンへ関心を抱いたオランダは、アデン港に代わってコーヒー交易で脚光を浴び始めていたモカ港に來航し、その商圏拡大を求めて交易活動に乗り出していた。17世紀中葉にはオランダによるモカ港攻撃もおこなわれ、これに対してザイド派イマーム政権は、オランダによるイエメンの諸港や制海権掌握への動きを警戒し、彼らの交易活動を時として規制したものの、オランダをいまだ早急な対応が迫られる脅威とまではみなしていなかった。この時期にイエメンが隣国のヤアーリバ朝への対応を基軸としてインド洋西海域の諸王朝との関係構築およびその展開に傾注していた背景には、恐らく西欧諸国の動向に対するこのようなイエメン側の見解があったと考えられる。

さて、17世紀のインド洋西海域世界におけるイエメンの対外関係を総合的に検討するためには、本稿で鳥瞰した諸王朝との関係をそれぞれさらに細かく分析してゆくことは勿論のこと、これと並行して、同時期の紅海海域における国際情勢に関しても検討する必要がある。なぜならばこの時期には、紅海を挟ん

⁷⁶⁾ 福田前掲論文「ペルシャ湾と紅海の間」、118頁。

でイエメンの対岸に位置するエチオピアにおいて隆盛していたキリスト教国のソロモン朝や、紅海の国際港の一つであるサワーキンに駐留して紅海やアラビア半島を睥睨していたオスマン朝勢力、あるいは聖地メッカのアミール政権などの諸政権・諸勢力との関係が確認され、それらの諸関係がイエメンの対外政策上において、大きな割合を占めていたからである。加えて、このような国家間の公的な関係以外にも、国家的な枠組みを超えて存在していたさまざまな戦層・階層に属する人びとの移動や交流の諸相もまた、考察すべき課題としてあげられる。たとえば、国際的な商人集団の一つであったインドのバニヤ商人たちのイエメンにおける活発な商業・貿易活動や、イエメンのハドラマウト地方出身者たちによる故郷と紅海両岸やインド西岸との頻繁な往還⁷⁷⁾、あるいはイランを中心としたペルシャ湾海域からイエメンへ流入してきた漂流民⁷⁸⁾などに関する考察は、この17世紀のイエメンが紅海やアラビア海を媒体として形成、維持していたインド洋西海域世界の諸地域との重層的な交流関係の解明に繋がると思われる。今後の課題として、さらに検討を重ねてゆきたいと考えている。

史料とその略号

Ghāyat: Yahyā b. al-Ḥusayn, *Ghāyat al-Amānī fī Akhbār al-Quṭr al-Yamānī*, ed.

A. F. Sa'īd 'Āshūr, Cairo, 2vols., 1968.

al-Jawhara: al-Jurmūzī, *al-Jawhara al-Munīra fī Jumal min al-Sīrat fī Akhbār al-Imām al-Mu'ayyad bi'llāh*, MS. Leiden, Rijks Univ., No. Or. 6999 (2).

Ma'āṣir-i 'Ālamgīrī: Muḥammad Sāqī Musta'īd Khān, *Ma'āṣir-i 'Ālamgīrī*, English

77) この問題について筆者はすでに、17世紀末に著されたハドラマウトのサイドに関する一伝記集を用いて、ハドラマウト地方出身者たちの移動と移住の一端を検討したが、今日のハドラマウト地方の諸図書館には、その所在こそ確認されているものの、いまだに利用されていない多数の貴重な史料が所蔵されていることから、今後の進展が大いに期待される研究分野であるといえるだろう。拙稿「16～17世紀のハドラマウトの人びとの移動・移住活動」『西南アジア研究』第61号、2004年、47-66頁。

78) たとえば『日誌』には、主として飢饉などの理由によりイランの地を脱してイエメンへ流れ着いた漂流民に関する記述がみえる (*Yawmiyāt Ṣan'ā'*, pp. 149, 166-7)。

tr. Sarkar, J. N., Calcutta, 1947.

al-Shudhūr: Muḥsin b. Aḥsan b. Abī Ṭālib, *al-Shudhūr al-‘Aşjidīyat fī al-Khilāfat al-Aḥmadiya*, Yale University library, No. 1656.

Sīrat al-Mutawakkil: al-Jurmūzī, *Sīrat al-Mutawakkil ‘alā Allāh Ismā‘īl b. al-Qāsim al-Manşūr*, Vatican Library, MS., No. 971.

Ṭabaq: Ibn al-Wazīr, *Ṭabaq al-Ḥalwā wa şihāf al-Mann wa al-Salwā*, ed. Muḥammad ‘Abd al-Raḥīm Jāzim, Şan‘ā’, 1985.

Ta’rīkh Thagr ‘Adan: Abū Makhrama, *Ta’rīkh Thagr ‘Adan (Arabische Texte zur Kenntnis der Stadt Aden im Mittelalter)*, ed. Löfgren, O., 3vols., Leiden, 1936, 1950.

Ta’rīkh al-Yaman: Abū Ṭālib, *Ta’rīkh al-Yaman ‘aşr al-Istiqlāl ‘an al-Ḥukm al-‘Uthmānī al-Awwal min sanat 1056 H. ilā sanat 1160H.*, ed. ‘Abd Allāh Muḥammad al-Ḥibshī, Şan‘ā’, 1990.

Tuḥfat: al-Jurmūzī, *Tuḥfat al-Asmā’ wa al-Absār bi-Mā fī al-Sīrat al-Mutawakkiliya min Gharā’ib al-Akḥbār*, Şan‘ā’, Maktabat al-Jāmi‘ al-Kabīr al-Gharbīya, No. 63 (Ta’rīkh).

Tuḥfat al-A’yān: ‘Abd Allāh b. Ḥumayd al-Sālimī, *Tuḥfat al-A’yān bi-Sīrat Ahl ‘Umān*, 2vols. , ‘Umān, n.d.

Yawmiyāt Şan‘ā’: Yahyā b. al-Ḥusayn, *Yawmiyāt Şan‘ā’ fī al-Qarn al-Ḥādī al-Aşhar*, ed. ‘Abd Allāh Muḥammad al-Ḥibshī, Abu Dhabi, 1996.

Yemenite Embassy: Donzel, E. J. V., *A Yemenite Embassy to Ethiopia 1647-1649: al-Ḥaymī’s Sīrat al-Ḥabasha; newly introd., transl. and annot.*, Stuttgart, 1986.

THE FOREIGN RELATIONS OF YEMEN IN THE WORLD OF THE WESTERN INDIAN OCEAN IN THE 17th CENTURY

KURIYAMA Yasuyuki

In 1636 the regime of the Imām of the Zaydī sect succeeded in eliminating the forces of the Ottoman dynasty, which had been stationed in Yemen since 1538, and spreading the territory under its control from the mountainous areas and high plains of the north to the regions of the Red Sea coast. Then, when it consolidated its rule over the coastal region of the Arabian Sea, including the entirety of southern Yemen, it precipitously extended its military and political influence by dispatching forces to the Ḥaḍramawt region in the Southeast of Yemen, which was still under the control of Ottomans in 1659. As a result, the political conditions of the Arabian Peninsula were greatly changed and the repercussions reached as far as India and Iran.

This study chiefly relies on contemporary Arabic-language sources concerned with Yemen and Southern Arabia to examine the foreign relations maintained by Yemen in the world of the western Indian Ocean, which served as medium linking the Persian, Red and Arabian seas, by focusing on the rule of the Zaydī Imām al-Mutawakkil (reigned 1644-76), who governed 17th-century Yemen, when these changes were most conspicuous.

I specifically address the Mughāl dynasty in India, the Safavid in Iran, and the Ya'aruba in Oman, each a large-scale monarchy in the western half of the Indian Ocean in the 17th century, and analyze the relations of each of these kingdoms with Yemen, and then survey the structure of the world of the western Indian Ocean as seen in these relationships as a whole.

As a result, I make clear that although Mutawakkil succeeded, on the one hand, in initiating and then developing good relations with the Mughāl Emperor Awrangzīb and the Safavid Shāh 'Abbās II through the dispatch and reception of emissaries and exchanges of gifts and letters, on the other hand, he confronted the Ya'aruba dynasty of Sulṭān bin Sayf I over the territorial issue of the Ḥaḍram region and Oman's maritime activities.